

カリタス女子中学校 第一回入学試験

二〇二三年二月一日（午前）実施

国語問題

（五〇分）

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一 次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。ただし、④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

① パーティーでの余興。

② 仁愛の心を持つ。

③ 城を築く。

④ 国際連合にかめいする。

⑤ 大統領をこえいする。

⑥ げきやくを使った実験。

⑦ 政治家をこころざす。

【二】 次の【Ⅰ】の文章を読み、後の問一から問五に答えなさい。【Ⅱ】の文章は問六に関するものです。問六を解く際に読み、解答しなさい。
※のついている語は、文章のあとに語注があります。

【Ⅰ】

私が子どもだった時代、竹や木で細工した玩具※がんぐを作るため、ナイフは必需品ひつじゅひんでした。ほとんどの子どもたちが、ナイフを上手に使っていました。ところが、いつの間にか「ナイフを使って、指など切って怪我けがしたらたいへんだから」と、だんだんナイフを使った授業は減っていき、現在は家でも学校でも、子どもたちがナイフを使う機会がほとんどなくなってしまいました。

結果、子どもたちがナイフで手を切る事故もなくなり、一見、安全な生活が保証されたようにみえます。

しかし、裏を返せば、今の子どもたちには「ナイフで手を切るという小さな失敗を経験する機会」がなくなってしまったのです。そして、ナイフで手を切ったことのない子どもは、その痛みも、傷が後からどうなるかも知らないので、実際にナイフがどれほど危険なものなのか、知らないまま成長してしまいます。すると、1 ナイフを使わなければならなくなったとき、ちゃんと使いこなせないばかりか、失敗して大きな怪我を負うことになるかもしれません。ナイフで切った痛みを知らないことで、他人をナイフで切ったり刺さしたりしたときの痛みも想像できなければ、痛みを知っている人よりは、安易にナイフを他人に向けることにもつながりかねません。

A つまり、子どもの頃ころにナイフに触れる機会を失ったことで、後に大きな失敗を起こす可能性が高まるのです。

小さな失敗が起こるリスクを徹底的てつていできに排除はいじょし続けることは、将来に起こりうる大きな失敗の可能性を高めてしまうことになるのです。

B 現在主流となっている「これは成功、それは失敗」「こっちはオーケー、あっちはダメ」という〇×式マルバツシキの教育方法では、表面的な知識しか学べません。そこに欠落している「真の理解」がないままだと、決して応用力を身につけることはできません。ムダを省いた合理的な教育や勉強法は、効率的な学習を実現しやすいですが、それは2 暗記を中心とした表面的知識の蓄積ちくせきであって、体験的知識に基づいた「自分で考える力」の養成には役立たないのです。そのような現代の教育方法の弱点についても、きちんと考えなければなりません。

あえて必要と思われる失敗を体験させることで、子どもたちは自分自身でその失敗から体験的知識を学び、判断力や応用力を獲得かくとくするのです。

そう考えると、やはり実感を伴った体験学習が重要になります。失敗を恐れない気持ちを育み、失敗体験を積極的に活用する教育が今こそ必要なのです。

3 他人の失敗経験を伝えるだけでも意義があります。

しかし、現実とは逆でした。

失敗には「回り道」「不必要」「できれば避けたいもの」「隠すべきもの」「忌み嫌うべきもの」「他人には何としても知られたいもの」などというマイナスのイメージしかありません。たった一度、ついやらかしてしまっただけで、その失敗の記録はいつまでもインターネット上に残ってしまう。大きな失敗でもしたものなら、あつという間に拡散して、匿名の見知らぬひとたちから誹謗中傷され、袋叩きにされかねない現代においては、なおさら、失敗は敬遠すべき存在となっています。

実は、かつて私も「ある問題に対して決まった解答を最短で導き出すための正しいやり方」だけで、大学の授業で学生たちに指導していました。当時は「できるだけ早く正解に到達できる効率的な方法を教えることが大切だ」と考えていました。

しかし、そのやり方で教えられた学生たちが得たものは、表面的な知識に過ぎませんでした。彼らはパターン化された既存の問題や課題に対してはきちんと対応できました。しかし、見本や手本のない新しいものを自分たちで考えて作るようにと指導すると、表面的知識は全く役に立たず、誰も対応することができませんでした。

それどころか、「自分たちはどんな新しいものを作り出せばいいのか」という第一歩目の課題設定ですら、自分の頭では考えられない学生が少なくなかったのです。

この深刻な状況に気づいた私は、何とかこの問題を解消しようと、いろいろな指導方法を試しながら、最も効果的な教え方を模索しました。そのプロセスの中で、私は「予期しないことが起きて、思い通りにならないことを体験すると、誰もが真の理解の大切さを痛感する」ということに思い至りました。

それ以降、私は授業であえて学生たちに失敗体験させるように心がけたのです。

失敗を経験し、体験的知識を学ぶことは、学生が大きく成功する貴重な機会です。そこで、私が教鞭をとっていた東京大学工学部機械科の授業では、できるだけ学生たちが失敗できる授業内容を組んでいました。その一つが、学生を四人一組のグループに分けて、決めら

れた予算内で、自由にシステムを設計・製作させる体験学習でした。

この授業を有意義な体験学習にするためのコツは、あえて細かい課題設定を行わないようにすることです。

例えば「コンピュータでコントロールして、何かの動作をさせるシステム」という課題を与えた（あた）しましょう。その時、どんな動作をさせるのか、部品には何を使うのかなどについて、教官からは何も指示しないのです。そうすると、それぞれのグループが自分たちで決めなければならないので、学生たちは自分の頭で必死に考えながら、自分たちはどんな課題でシステムを設計するのか、そこから考え始めなければならないのです。

システムの課題が決まり、どんな動きをさせるか、具[※]対的なアイデアが浮かぶと、学生たちは予算の三〇〇〇円を持って、当時日本一の電気街だった秋葉原を歩き回って、自分たちが作る機械に必要な部品を探して、購^{こうにゅう}入していきます。

テーマが決まり、部品が揃^{そろ}うと、

4

設計と製作の作業をスタートさせ、決められた期限までに「設定した課題に沿ってシステムを動かす」というゴールを目指して、ひたすら努力を続けます。ここまでの過程においても、「一度決めた課題の欠点に気づいて設定し直す」「部品が見つからない」「買ってきた部品が間違^{まちが}っていた」など、いくつもの失敗が起こります。その失敗をリカバ[※]ーするたび、学生たちには体験的な知識が蓄積されるのです。

このグループ学習では、アルコールランプから出る熱を利用して動く「スターリングエンジン」というハードウェアを作らせたこともありました。熱機関によって何をどういうふうに動かすかは、学生たちの自由な発想に任せました。この授業でも、学生たちはまず自分たちで課題の設定と設計を行ってから、与えられた予算を持って、今度は東急ハンズあたりを探索して回りました。それぞれが自分たちでグループごとに決めた課題を解決するべく、お互^{たが}いに知恵^{ちえ}を出し合って、スターリングエンジンを動力とするハードウェアを作り上げていきました。

こうして体験学習の授業で作ったものは、演習の授業のとき、グループごとに作り上げた成果物の発表会を行います。

発表会とは言っても、自分たちがもともと設定していた通りにシステムは動かず、当初の設定通りにスターリングエンジンで動くハードウェアを完成していないケースが大半でした。何とか動く程度の成果を上げるグループがあればいい方で、ほとんどのグループは、どんなに頑^{がん}張^ばっても全く動かないという状態でした。

つまり、プロセスだけでなく、結果においても、失敗したものばかりだったのです。

その結果こそ、こちらの狙い通りでもありません。

もし、授業の最初に課題の設定の手本や完成品の見本となるサンプルを提示して真似してもいいとなれば、学生たちのレベルを考えると、とても簡単に課題をクリアしてしまったと思います。現在、多くの教育現場で実践されている「成功まで最短かつ効率よく到達する方法の指導」という従来型の学習方法は、この「最初に手本や見本を提示する」というスタイルと同じです。

しかし、この合理的な指導方法で暗記した表面的な知識は、いざ真似できる手本や見本のサンプルがない場面に来て、それでも何とか状況を打開しなければならないときは、全く役に立ちません。

ゼロから何かを作り出すということは、表面的知識が通用するほど簡単なことはありません。だからこそ、体験的学習で得たいくつもの失敗は、学生たちにとって、とても貴重で有意義な体験になります。自分でちゃんと考えて、危機的状況を回避したり、大きな失敗の起こる可能性を下げたりするときに必要な体験的知識は、自分自身で体感しなければ学習できないのです。

〔語注〕

※玩具……………おもちゃ。

※既存……………すでに存在していること。

※模索……………手さぐりで探し求めること。

※プロセス……………過程。

※教鞭をとっていた……………先生として教えていた。

※具対的……………具体的。

※リカバー……………挽回すること。

※東急ハンス……………素材や雑貨をあつかうお店の名前。

【Ⅱ】

二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災で、福島第一原子力発電所が事故を起こしました。その結果、一〇年以上経ったいまもなお、福島県の一部の放射能汚染地域ではひとびとが暮らせない状況となっています。

この福島第一原子力発電所の事故が深刻な事態となった原因の一つは、非常用ディーゼル発電機が発電所の地下一階にあつたため、津波による浸水で動かなくなったからです。

では、なぜ、非常用発電機は地下一階にあつたのでしょうか？

〈中略〉

いろいろと調べた結果、私は、驚くべき事実を推認するに至りました。

実は、東京電力福島第一原子力発電所で非常用ディーゼル発電機やバッテリー（直流電源）、電源盤を地下一階に設置したことには、科学的な根拠がなかったのです。

ただ、「見本にしたアメリカの原子力発電所の設計がそうだったから」というのが主な理由だったらしいのです。

ならば、福島第一原子力発電所の設計の見本となったアメリカの原子力発電所では、なぜ、地下に設置しなければならなかったのでしょうか。

その理由がわかったとき、私は愕然としました。

見本にしたアメリカの原子力発電所の非常用ディーゼル発電機やバッテリー（直流電源）などが地下一階に設置されたのは、「地上に設置したら、巨大なトルネード（竜巻）の襲来を受けたとき、破壊されてしまうから」でした。

〈畑村洋太郎『やらかした時にどうするか』（ちくまプリマー新書）より〉

〔語注〕

※推認………わかっていないことをもとに推測し、事実であると認めること。

※トルネード………北米大陸の中南部地方に多く起こる気象現象。日本の竜巻に比べ、規模や被害がきわめて大きく、アメリカの原子力発電所の多くが、トルネードがたびたび発生する地域に位置している。

問一

1 4 に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア せめて イ いざ ウ いよいよ エ あくまでも オ なおさら

問二

A 小さな失敗が起こるリスクを徹底的に排除し続けることは、将来に起こりうる大きな失敗の可能性を高めてしまうことになる
とありますが、前に出ているナイフの例に当てはめると、「小さな失敗が起こるリスク」、「将来に起こりうる大きな失敗の可能性」
とはそれぞれどのようなことですか。答えなさい。

問三

B 次の文章は、現在主流となっている「これは成功、それは失敗」「こっちはオーケー、あっちはダメ」という○×式の教育方法
についての筆者の考えをまとめたものです。【1】～【3】に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～キの中
からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

この教育方法の特徴は、暗記などを用いて短い時間で知識を習得させること、つまり【1】を重視する点である。学習の
過程で「ムダ」^{イコール} 【2】を可能な限り減らすことは合理的とも言える一方、知識が【3】的なものにとどまることに
よるマイナス面があると筆者は考えている。

ア 表面 イ 体験 ウ 失敗 エ 成功 オ 効率 カ 効果 キ 正解

問四

C 袋叩きふくろたたにされかねない を言いかえたものとして、もっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 袋叩きふくろたたにされるに決まっている

イ 袋叩きふくろたたにされてはいけない

ウ 袋叩きふくろたたになるべきである

エ 袋叩きふくろたたにされるかもしれない

オ 袋叩きふくろたたになることは決してない

問五

【Ⅰ】の文章には、二カ所に真の理解という言葉が出てきます。これについて次の(1)(2)に答えなさい。

(1) 真の理解のためにはどのようなことが必要であると筆者は述べていますか。三十字程度で答えなさい。

(2) 真の理解をすることでのどのような能力が備わると筆者は述べていますか。四十字程度で答えなさい。

問六

【Ⅱ】の文章は、東日本大震災の際に起きた「東電福島原発事故」の調査・検証委員会の委員長を務めた筆者が、事故原因の一つについて述べたものです。筆者は、この事故には【Ⅰ】の文章にある現代の教育方法の弱点が表れていると考えています。どのようなところに現代の教育方法の弱点が見てとれますか。【Ⅱ】の文章から読みとって具体的に答えなさい。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついている語は、文章のあとに語注があります。

一九四四年秋。東京では空襲くうしゅうが増えてきたため、子どもたちを東京からはなれた土地に疎開そかいさせていた。東京の保育所の保母ほぼ（保育士）である「光枝みつえ」たちも、約五十名の園児たちと共に埼玉県北部に疎開し、「疎開保育園」を運営していた。「光枝」は仕事が出来ず、保母のリーダーの「楓かえで」から叱しかられてばかりだったが、先輩の「静子しずこ」、「正子まさこ」、「咲子さきこ」や同い年の「好子よこ」に支えられてがんばっていた。以下の場面は、「疎開保育園」を始めてから二か月が経った、年末の出来事である。園児の親たちが疎開先を訪ねて再び東京へ帰って行った後、子どもたちはおねしよをすることが多くなっていた。

おねしよ 騒さわぎが始まって十日が経った。

子どもたちのおねしよは続いている。

「今日はおしっこをしませんように」と小さな手を合わせて願い、就寝しゅうしんしても、朝、自らの失敗に気づき、子どもたちは肩かたを落とす。子どもたちだっておねしよなんてしたくない。

おねしよは恥はずかしいことだとわかっている。

布団ふとん干しが大変なのも、洗濯せんたくが重労働なのも知っている。

何より、大好きな先生たちが辛い顔をするのが、子どもたちだって辛い。

だから、おねしよをしないと固く決心しているのに、A そうは問屋がおろさないのである。

そのうえ、おねしよ騒さわぎが始まって以来、冷たい雨が降る日が続いていた。

※ 本堂の中に縄なわを張はって、たくさんの布団を所狭せましと干している。おしっこの臭においがあたりに充満じゅうまんしていた。

ようやく、今日になって雨脚あまあしが弱くなった。ときおり、雨がやみ、雲の間から薄明うすかりがもれたりもする。

光枝は早く晴れますようにと、空に祈いのらずにはいられない。

外に出られない子どもたちは、布団の合間で思い思いに遊んでいる。

男の子たちは正子と相撲すもうをとっていた。力自慢じまんの正子は相撲も強い。

静子は、女の子たちと折り紙やお絵かきをしていた。

好子と光枝は縁側で繕い物をしていた。

「よし、出来た」

好子は顔をあげ、微笑んだ。辰雄のセーターのほころびのところに、好子は汽車の刺繍をさしていた。その精緻な刺繍をのぞきこみ、光枝の目が輝いた。

「わあ。素敵なお刺繍」

好子は嬉しそうに 1 微笑むと、繕い物の山にまた手を伸ばす。

B 光枝は自分が手にしているものを見て、ため息をもらした。辰雄のズボンのかき裂きを縫い合わせているのに、きれいに合わさらない。好子がせっせと仕上げていくのに、光枝がし終えたものはその半分にも満たない。

そのうえ、出来上がりがまるで違う。光枝の縫い目はばらばらで、子どもたちからはこのごろ「みっちゃん先生じゃなく、よっちゃん先生に縫ってほしい」と言われる始末だ。

子どもたちが疎開保育園に持参してきた衣類は少なく、同じものを繰り返し着るため、 C いきおい、繕い物も多い。それもまた、保母の役割だった。

「あつ」

また光枝の口からため息がもれた。うまくいったと思ったのもつかのま、針から糸が抜けてしまった。

「もう、それ、貸して」

たまりかねたように、好子が光枝の手から辰雄のズボンを取りあげた。

「いいの？」

好子が苦笑しながらうなづく。

「私はこういうの得意だもん」

「よっちゃんありがとう」

子どものように、光枝は好子に手を合わせた。好子は 2 口を前につきだす。

「でもみっちゃんは下手すぎ。反省しなさい」

「反省してるから」

光枝は正座をして軽く頭を下げる。しょうがないなあという顔で好子は「うん」とうなずいた。

〈 中 略 〉

「ええと、当面の問題は――」

「子どもたちのおねしょ、ですね」

すかさず、楓がいった。※わきもと脇本はあごに手をやった。

「おねしょか。何かいい意見はないか？ おねしょを治す方法について」

正子の手をあげる。

「いや、まあ、体が冷えるからじゃないかな。お風呂には滅多めったに入れないし。寝る前ねに足をお湯で温めたらどうだろう」

「うん」

脇本がうなずく。

「そっか」

光枝も正子に向かって首をふった。

「他には何かない？」

「寝る前に塩をなめさせるといって聞いたことがあります」

「なるほど」

意見をいった静子に、楓が同調した。

「あ！」

光枝が手をあげた。楓が期待薄という表情で、
X
発言を促す。うなが

「何とかって神様を拜む呪文じゅもんがあるとかって——」

楓の眉まゆが吊り上がる。

「くだらない。迷信。非科学的。現実的に考えて」

「じゃああの、おねしょ癖くせのついた子を、三時間ごとじゃなくて二時間ごとに、夜起よぎこしてお便所に連れて行くっていうのはどう？」

そういった正子を、光枝は驚いた顔で見上げた。

「ええ！ 私たち、いつ寝るんですか？」

三時間ごとだって大変なのに、二時間ごとなんて光枝には考えられない。それまで書記としてノートをとっていた好子も鉛筆えんぴつをおいて手をあげる。

「私、絶対無理です」

「私も」

「そりゃそうだ。私も無理だ」

光枝に、言いだしつぺ当人の正子が続いた。

脇本はテーブルに肘ひじをつき、身を乗り出した。

※たいしょうりょうほう
「対症療法たいしょうりょうほうじゃなくって、根本的な原因について考えてみないか」

「そんなのわかりきってます」

気が付くと、光枝は叫さけんでいた。一気に続ける。

「ご両親はなと離はなれて寂さびしいからです。だって、お母さんたちが来た夜からだもの、おねしょ増えたの。ねえ」

だが、楓があきれたとでもいうような顔で、首を横よこに振る。

「その問題、どうやって解決するの？ そんなことはみんなわかってるの。それでも何とかする。それが私たちの務めでしょ」

強い調子で楓は光枝を一刀両断に切り捨てた。

その瞬間しゅんかんに、光枝の何かがはじけ飛んだ。

「何よ、私ばかり叱なぐって。楓さんはどうせ、咲※ちゃんより私が、私がいなくなればよかったと思ってるんでしょ」

乱暴に光枝は立ち上がり、楓をにらみつけた。

「話し合いなんて大っ嫌い！」

それっきり光枝は庫裏を飛び出した。

「みっちゃん！」

光枝を追いかけようとする好子を静子が押しとどめた。

自分なりに一生懸命やっているのに、楓は何も認めてくれない。

下手な縫物だつてやっている。布団干しだつてがんばっている。

あかぎれだらけになった手で洗濯もしている。

子どもたちとも遊んでいる。子どもたちと遊んでいる時間は、ほかの保母よりも、光枝がいちばん長いかもしれない。

当番の日は、光枝も夜中三時間ごとに起きて、子どもたちをお便所に連れて行っているなんて、友だちや家族が聞いたら、驚くに違いない。

そんなことができるなんて、みんな、絶対に思っていないから。

子どもたちのために、眠くてもがんばって起きている。

よい保母になろうと努力もしているつもりだ。

それなのに、楓にはいつだって劣等生のように扱われる。

光枝の胸に悲しみが広がった。

本を読むことが何より好きなのに、ここでは一人の時間も持てない。

それが光枝は一番つらかった。

いや、疎開保育園に来て以来、やらなくてはならないことに追われるだけで、本来、どんな自分だったのか、もはや思い出せないほどだ。一人になれるのは布団の中だけ。

大好きな物語を思い出し出したい。ほんやりして、頭に浮かぶことをゆつくりと味わったりもしたい。そしたらどんなに楽しいだろう。

でも考えごとなど、ここではできない。

布団に入るなり、泥どろのように眠ねってしまうから。

体も心もすり切れるほど、疲れ果つかてている。

もういやだ。

こんなところにいたくない。

咲子より先に逃げ出にせばよかった。

逃げ出すのは咲子ではなく、自分のほうがよかったのだ。

そのほうがよかったと、楓やほかの保母たちはきっと思っている。

光枝の涙なみだが止まらない。

鳥の声が遠くに聞こえて、光枝ははっと目をあけた。

雨音が消えていた。

「——え？ まこちゃん？ ——まさか！」

まことが隣となりで寢息とどろをたてている。昨晚、光枝はまことの布団に着の身着のままでもぐりこみ、泣きながら眠ねってしまったらしい。

そこで光枝は **3** になった。まことはおねしょの常習犯だ。

あわてて布団をめくり、鼻を動かした。

あれつと首をかしげた。臭いがしない。

おそろおそろ手を伸ばす。

濡ぬれていない。布団は乾かわいたままだ。

光枝はまことを揺ゆさぶった。

「まこちゃん、やったやった！ おねしょしてないね。えらいね、えらいね！ えらい、えらい」

まことが目をこすり、ゆつくりと目を開ける。それから起き上がった。

「どうした、どうした？」

※「おしと（こ）ー」

光枝はまことを抱き上げた。

「あ、行こうか。よし、じゃあ立って、よいしょと」

抱っこしたまま、お便所へ向かう。もぞもぞとまことが動いた。

「ちよと待ってね。まだよ。がんばれ、がんばれ」

「おしと（こ）ー」

その日一日、まことはご機嫌だった。おねしよをしなかったことが、大きな自信になったのだろう。よく笑って、走り回った。

光枝が、添い寝をしたらまことのおねしよが止まったことを打ち明けると、好子はしる光枝をすぐさま楓のところに連れていった。好子はまことのおねしよが止まった経緯を手際よく説明する。

まことの布団で偶然寝てしまったというところで、光枝は楓に

4

にらまれたような気がして、思わず首をすくめた。

やっぱり、楓に提案するなんてやめておけばよかったと、光枝は唇をかんだ。

だが、お小言はなかった。

「子どもたちと一緒に寝ることは、子どもたちに自立を促し、自主性を育てるという私たちの教育方針に反することなんだけど」

楓は腕を組み、考え込んでいる。好子は重ねて訴える。

「でも、あのまこちゃんが、みっちゃんと一晩一緒に寝ただけでおねしよしなかったんですよ」

楓が光枝を見た。

「——みっちゃんはどう思うの？ 自分の意見言ってごらん」

また怒られるかもしれないと思うと怖かった。

だが、好子が頑張れという目で光枝を見つめている。光枝は、顔をあげた。

「まこくん、すごく嬉しそうでした。目が覚めた時、私が隣にいたからか、おねしよしなかったからかはわかりませんが、だから、

その――」

楓がうんとうなずいた。

「そうね。それでおねしょが減るなら、やってみる価値はあるわね」

好子と光枝は顔を見合わせた。

はじめて光枝の意見が通ったのだ。光枝は肩をすくめて、照れたように笑った。

〈五十嵐佳子『小説 あの日オルガン』（朝日新聞出版）より〉

〔語注〕

※本堂……………疎開保育園はお寺を借りている。

※精緻……………とても細かく、綿密なこと。

※脇本……………「光枝」たちが働く保育所の所長の男性。保育所が疎開した後も、東京に残っていたが、ここでは話し合いのために疎開先に来ている。

※対症療法……………問題を根本的に解決するのではなく、目の前に生じている状態に対しての処理を行うこと。

※咲ちゃん……………「咲子」のこと。「咲子」が手紙を置いて疎開保育園からにげてしまう事件がこの直前で起きている。

※庫裏……………寺院についている、住職やその家族が住む場所。「楓」たち保母はここを話し合いの場所としていつも使っている。

※おしつと（こ）ー……………「おしっこ」と言おうとしているが、「こ」を「と」と発音してしまっている。

問六

X 発言を促す。と、 Y 自分の意見言ってごらん はどちらも「楓」が「光枝」に発言を求めるところですが、 X の部分と
Y の部分とでは、「光枝」に対する「楓」の気持ちが変化していると考えられます。どのように変化しましたか。
X の部分と Y の部分とのちがいがわかるように、自分の言葉で説明しなさい。

問七

「好子」はどのような人物であり、「光枝」にとってどのような存在だと言えますか。その説明としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもたちからも繕い物の上手さを認められており、「光枝」にとっては、優しく面倒を見てくれて話しやすい、安心して甘えられる存在である。

イ 繕い物が上手だけではなく男の子と相撲をとるなど活発で、「光枝」にとっては、疎開保育園の仕事の喜びも悲しみも分かち合うことができる存在である。

ウ 保育園の仕事におけるミスを防ぐために保母たちに常に厳しく接しており、「光枝」にとっては、尊敬する上司であるとともに、何でも相談できる存在である。

エ 繕い物よりも折り紙やお絵かきが得意なので、繕い物が苦手な「光枝」にとっては、他の保母から怒られるつらさを共有できる存在である。

オ 話し合いの場で皆の意見を引き出せるリーダーで、上手に自分の意見をまとめられない「光枝」にとっては、自分の本当の思いを皆の前で代弁してくれる存在である。

国語の問題はこれで終わりです。

